

<NQN>☆香港返還 25 年 「株式市場の拡大続く」「ドルペッグが独自性支える」現地関係者に聞く (Asia ウォッチ)

香港は7月1日に中国返還 25 周年を迎える。香港株式市場はその間拡大を続け、時価総額は 1997 年当時の 3 兆香港ドル程度から 2021 年には 40 兆香港ドル超とおよそ 13 倍に増えた。上場銘柄数も 97 年当時の約 600 銘柄から 22 年 3 月末時点で 2500 銘柄余りに増加。主要株価指数であるハンセン指数の構成銘柄に占める中国本土系銘柄の比重は 7 割近くに高まり、市場全体の中国色が強まった 25 年間でもあった。今後はどうなるのだろうか。現地の市場関係者に聞いた。

■「香港と中国本土、株式市場は役割分担し拡大」

香港の大唐資本のローザ・リー最高投資責任者 (C I O)

/home/member/news/202206/uc1jpg_4ff52cdcdabe13eb929d1094a5a201f3.jpg?format=raw

投資家の中国投資意欲はなお強く、関連銘柄への資金流入が続くとみられる点を踏まえると、香港株式市場の規模拡大は続くだろう。香港は既に中国の一部であり、中国色も一段と強まりそうだ。

半面、例えば深セン市場との統合など、香港と中国本土の株式市場が一体化するような展開にはおそれなくなると予想している。理由は中国本土市場と香港市場では役割が違うためだ。中国本土の株式市場はあくまでも中国国内の投資家にサービスすることを主眼としている。対して香港の役割は対外的な「窓口」だ。もし統合してしまえば、それぞれの長所が失われてしまうだろう。

中国と香港政府は香港、マカオと広東省を巨大な経済圏に見立てて連携を深める「粵港澳大湾区（グレートベイエリア）」の建設を進めてはいる。金融・経済面でのメリットが増し、香港にも追い風が吹くとの構想だ。だが、システムが違うなかでの本土と香港の統合にはかなりの時間を要するだろう。

投資家にとって最も重要なことは「安定」と「安全」だ。本土市場への直接投資は、海外投資家からみて香港市場への投資に比べてリスクが高いとの見解もしばらく変わりそうにない。香港と中国本土の株式市場はそれぞれ役割を分担しながら拡大するのではないか。